

(別紙様式10)

## 2021年度 北極域研究共同推進拠点 共同研究等報告書

【申請区分】:  萌芽的異分野連携共同研究  共同推進研究  
 産学官連携フュージビリティ・スタディ  
 共同研究集会  産学官連携課題設定集会

【研究課題名】: ウェルビーイング(暮らしの豊かさ)に着目した地域づくりのあり方を人新世下の北極域から提案する

【研究期間】:2021 年度

### 【共同研究員】

共同研究員	氏名	所属・職名	専門分野	区分
研究代表者 (拠点外) (注2)	林直孝	カルガリー大学・准教授	生態人類学・開発学	
研究分担者 (拠点外) (注2)	井上敏昭	城西国際大学・教授	文化人類学	
	野口泰弥	北海道立北方民族博物館・学芸員	社会人類学	
研究分担者 (拠点内) (注2)	立澤史郎	北海道大学大学院文学研究科・助教	保全生態学	
	的場澄人	北海道大学低温科学研究所・助教	氷雪学	
研究協力者 (注2) (注3)	近藤祉秋	神戸大学大学院国際文化学研究科・講師	文化人類学	
	高橋美野梨	北海学園大学・准教授／北海道大学 スラブ・ユーラシア研究センター 共同研究員	国際関係論	
	大石侑香	神戸大学大学院国際文化学研究科・講師	文化人類学	
	山脇大	国際協力機構フランス事務所 企画調査員／北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 共同研究員	経済学	
	金森万里子	東京大学大学院医学系研究科 博士課程	公衆衛生学	

(注2) 拠点内外については、募集要項別添の北極域研究共同推進拠点を形成する3研究施設の研究者リストをご覧ください。

(注3) 計画申請書に含まれていなかった方でも結果的に本共同研究に参画された方(招へい者等)が居られれば、研究協力者として記述して下さい。

### 【研究の内容】

(1) 概要を400字以内(文字のみ)で記載してください。

本事業は、2019年度の共同推進研究「変動する気候や社会状況の中で主体的に地域作りに取り組む先住民社会の研究」の延長線上に位置する。本事業の趣旨は以下の通りである。北極域は気候が厳しく、多くの住民は生活の糧を自然環境に依存した生業(狩猟や漁業)に頼っている。したがって、健全な自然環境つまり利用可能な資源がなければ、生活の質は保てない。しかし、近年は、予測不可能な突発的な異常気候や環境変化(人新世)により彼らの生活環境は大きく変わってきている。気候変動が進むなか、北極域住民は、自然環境のウェルビーイング(健全さ)をどのように受け止め、自分たち自身のウェルビーイング(生活の質)を高めようとしているのだろうか。北極域に住む人々の生業の現在のあり方を比較することで、地域づくりの方向性を検証する。

(2) 図表や写真も交えて、研究の内容や成果等を2000字程度でまとめてください。

元の計画では、北大で集会を2回行い、2カ年事業の成果として2月にワークショップを行い、成果の普及を目指していた。しかし、パンデミックが未だ収束することなく、取りやめにした。そこで、2月20日に全体のオンライン会議を行い、本事業のテーマに関して議論を行った。

オンライン会議では、金森研究員の研究成果をもとに議論を進めた。以下は議題である。

### 議題

1. 開催にあたって
2. 発表:金森万里子氏「社会と健康の関係 ― 人も動物も健康で幸せに暮らせる社会へ ―」  
質疑応答
3. 今後について
4. 閉会

金森研究員の発表は、人と動物の関係を考える上で重要だった。畜産業に携わる人たちの生活の質のみならずその家畜の健康状態、そして畜産業者と彼らの家畜との精神的、倫理的関係にまで触れた。生活のウェルビーイングは、単に自然資源の充足だけで決まるものではない。生計活動を通して、人が動物や自然環境との精神的繋がりや倫理観を強くして初めて、豊かな生活を送ることができるからである。更に研究会では、実際に家畜を飼っている畜産家たちや精肉業に関わっている人た

ちも招き、自由に討論することが出来たので、現場の生の声が聞けた。これはオンライン会議ならではの利点であった。

残念ながら、パンデミックのために本事業は大幅に事業規模を縮小せざるを得なかった。研究計画書を振り返ってみると、当初は、地域社会のウェルビーイング(暮らし向き)の地域の環境条件、文化や社会制度、政治経済の側面から研究しようとしていた。注目事項は、以下の5点である。

- 1) 資源利用に関する知識や技術の存続と創造
- 2) 資源利用に関する地域固有の制度
- 3) 地域社会の人々の自然倫理観
- 4) 地域社会が属する国家の政策(資源利用に関して)
- 5) ヨーロッパ圏の経済動向。

2年の事業実施期間の中で、4)と5)は深く掘り下げられなかった。しかし、本事業のお蔭で、それまで、バラバラに研究活動を行っていた研究者同士が集まれる場を持てたこと、そして研究者同士の繋がりができたことは、本事業の成果である。

### 健康の社会的決定要因 (Social Determinants of Health) が健康に大きく関係する



(金森研究員のスライドから)

(3) 本共同研究に関する活動・実績等を下表に記入してください。

① 研究打合せ、学会参加・集会(注4)、調査等

(注4) 研究代表者、共同研究分担者、研究協力者、招へい者によるもの

日程(月日)	日数(日)	活動内容	場所	研究代表者、共同研究分担者、研究協力者、招へい者の参加者名・部署	参加者数(人)
2022.2.20	1	本事業のまとめの会議	オンライン	林直孝、立澤史郎、金森万里子、井上敏昭、野口泰弥、的場澄人、近藤祉秋、大石侑香、その	約13

				他 5 名ほど畜産関係者	
2021.03.31	1	「狩猟・倫理と地域づくり」研究会 共同主宰	オンライン	立澤史郎、金森万里子、本川哲代(「むかわのジビエ」代表)、藤田りかこ(ドッグトレーナー)	4
2021.07.02	1	日本環境教育学会北海道支部大会参加	オンライン	立澤史郎	約 60 人
2021.06.15-20	1	ICASS X (Xth International Congress of Arctic Social Sciences)	オンライン	立澤史郎	約 1600 人
2021.09.17	1	「氷室・風穴」研究会参加	オンライン	立澤史郎	約 10 人
2021.09.27-30	4	III Northern Sustainable Development Forum 参加	オンライン	立澤史郎	約 350 人
2021.10.07-09	3	Alaska Historical Society 参加	オンライン	立澤史郎	約 100 人
2021.10.28-29	2	2nd Workshop on "Food Life History of the North" 共同主宰	オンライン	立澤史郎	約 60 人
2022.02.19	1	「狩猟・倫理と地域づくり」研究会 共同主宰	オンライン	立澤史郎、金森万里子、本川哲代(「むかわのジビエ」代表)、藤田りかこ(ドッグトレーナー)	7 人
2022.02.21	1	「環境保全と地域づくり」NPO 打ち合わせ	オンライン	立澤史郎	4 人
2022.03.05-06	1	本環境教育学会北海道支部大会参加	オンライン	立澤史郎	約 90 人
2022.02.08-02.11	4	Alaska Forum on	オン	立澤史郎	約 700 人

		the Environment 2022 参加	ライ ン		
2022.02.28-03.04	5	Alaska Anthropological Association 49th Annual Meeting 参加	オン ライ ン	立澤史郎	約200人
2021.4.1～ 2021.4.19	19	調査	グリ ーン ラン ド・シ オラ パル ク村	的場澄人	1
2021.12.8～ 2022.3.11	63	調査	グリ ーン ラン ド・シ オラ パル ク村	的場澄人、黒崎豊・北海道大学 大学院環境科学院	2

## ②研究論文

研究代表者並びに、研究分担者あるいは研究協力者が著者の関連論文がありましたら可能な限り記載ください。

論文が複数ある場合は、そのフォーマットとして論文1の分をコピーして記載してください。

### 論文1

項目	記入要項	回答
(1)著者名(共著者名含む)、 発行年、論文タイトル、掲載 誌名、巻・号、ページ数、 DOI、出版年月日	Shichijo, H., Tatsuzawa, S., Sakamoto, S. H., and Morita, T. (印刷中) An Attempt to Clarify the Causes of Osteophagia among Sika Deer on Mageshima Island, <i>Journal of Warm Regional Society of Animal Science, Japan.</i>	

### 論文2

項目	記入要項	回答
(1)著者名(共著者名含む)、	近藤祉秋(2021)「内陸アラスカ先住民の世界と「刹那的な絡まりあ	

発行年、論文タイトル、掲載誌名、巻・号、ページ数、DOI、出版年月日	い」:人新世における自然＝文化批評としてのマルチスピーシーズ民族誌』『文化人類学』86-1, 96-114, 2021年6月30日。
------------------------------------	--

論文3

項目	記入要項	回答
(1)著者名(共著者名含む)、発行年、論文タイトル、掲載誌名、巻・号、ページ数、DOI、出版年月日	近藤祉秋(2021)「危機の「予言」が生み出す異種集合体—内陸アラスカ先住民の過去回帰言説を事例として」『文化人類学』86-3, )417-436、2021年12月31日、査読	

論文4

項目	記入要項	回答
(1)著者名(共著者名含む)、発行年、論文タイトル、掲載誌名、巻・号、ページ数、DOI、出版年月日	Dai Yamawaki (2021) The Political Economy of Russian Energy Policy: Evolution and Performance After Market Transition, KIER Discussion Paper Series, No.1066.	

論文5

項目	記入要項	回答
(1)著者名(共著者名含む)、発行年、論文タイトル、掲載誌名、巻・号、ページ数、DOI、出版年月日	山脇大(2022)「石油・ガス大国ロシアの再生可能エネルギーへの移行:現状と課題」『ロシア・ユーラシアの社会』印刷中。	

論文6

項目	記入要項	回答
(1)著者名(共著者名含む)、発行年、論文タイトル、掲載誌名、巻・号、ページ数、DOI、出版年月日	Iizuka, Y., Matoba, S., Minowa, M., Yamasaki, T., Kawakami, K., Kakugo, A., Miyahara, M., Hashimoto, A., Niwano, M., Tanikawa, T., Fujita, K. and Aoki, T. (2021): Ice core drilling and the related observations at SE-Dome site, southeastern Greenland Ice Sheet. Bull. Glaciol. Res., 39, 1-12. <a href="https://doi.org/10.5331/bgr.21R01">https://doi.org/10.5331/bgr.21R01</a> .	

論文7

項目	記入要項	回答
(1)著者名(共著者名含む)、	大島稔・野口泰弥 2022「日本人によるアリュート民族の研究(4)」:服	

発行年、論文タイトル、掲載誌名、巻・号、ページ数、DOI、出版年月日	部健「アリュート語資料」(2) 『北海道立北方民族博物館研究紀要』31:1-29、2022年3月末発行予定
------------------------------------	---

### ③研究書等著書

著書名・著者名	出版年月	出版社名
『食う、食われる、食いあう マルチスピーシーズ民族誌の思考』近藤祉秋、吉田真理子共編著	2021年11月	青土社
Hajime Kimura and Yuka Oishi. "Gaming for Arctic Sustainability." Toshiyuki Kaneda, Ryoju Hamada and Terukazu Kumazawa(eds.) Simulation and Gaming for Social Design. Springer. pp.169-183. (分担執筆)	2021.12	Springer

### ④特許等出願

特許、実用新案、商標	
------------	--

### ⑤研究発表(資料添付も可)

発表年月日	発表者名(共著者を含む)	発表タイトル	発表学会等名称	発表地	招待講演(○)
2021.06.16 (poster), 06.19 (oral)	<u>S. Tatsuzawa</u> (HU). E. Okhlopkov, E. Kirillin, M. Nikolay (IBPC, RAS, Russia)	Migration range shift of wild tundra reindeer and its impact on the local socio-ecological system in the Siberian Arctic	ICASS X (Xth International Congress of Arctic Social Sciences), Breakdown session 1” Reindeer pastoralists of the Arctic: effects of globalization and local adaptive strategies”	オンライン	
2021.07.03	<u>立澤史郎</u> (北大・文)	マゲシカの生態と生息地の保全	日本科学者会議北海道学術ワークショップ	オンライン	○
2021.09.28	<u>Shirow</u> <u>TATSUZAWA</u>	Russia-Japan Collaborative studies on Siberian Wildlife: from ecosystem researches to socio-ecosystem	III Northern Sustainable Development Forum, “Cold Lands Seminar”	オンライン	○

		conservation			
2021.10.08	Y. Kugo (UAF), Y. Hirasawa (東 亜大), G. Iwahana (UAF), <u>S. Tatsuzawa</u> (HU), K. Saito (JAMSTEC)	Food Life History in the Arctic Communities: Usages of Underground Cache and Food Preservation Practices	Alaska Historical Society 2021 Conference	オンラ イン	
2021.11.21	<u>Shirow</u> <u>TATSUZAWA</u>	馬毛島の生態系とマ ゲンカの保全	日本環境法律家連盟シ ンポジウム	オンラ イン	○
2022.03.01	Y. Kugo(UAF), M. Koskey(UAF), G. Iwahana(UAF), <u>S. Tatsuzawa</u> (HU), K. Saito (JAMSTEC), Y. Hirasawa (東亜 大)	Community-based Participatory Food Life History Projects in Siberia and Alaska	Alaska Anthropological Association 49th Annual Meeting, Session4” Contributed Papers in Cultural Anthropology“	オンラ イン	
2021.5.29	近藤祉秋	「俺たちは苦難の時 には山に行ったんだ ろう？」—内陸アラス カ先住民が語るコロ ナ禍中の過去回帰 言説—	第 55 回日本文化人 類学会研究大会	オンラ イン開 催	
2021.11.11	山脇 大	欧州で加速する脱炭 素の動き:現状と課題	第 1 回「脱炭素とロシア 経済」研究会	北大・ オンラ イン	○
2021.9.15	的場澄人(北海 道大学低温科 学研究所)、山 崎哲秀(一社ア バンナット)、青 木輝夫(国立極 地研究所)	2021 年 2 月にグリ ーンランドシオラパル クで生じた海氷流出 —海氷の脆弱性が将 来の地域住民の生活 に与える影響—	雪氷研究大会(2021・ 千葉—オンライン)	オンラ イン	
2022.2.1	的場澄人(北海 道大学低温科	グリーンランド北西部 の冬期の強風がフィヨ	金沢大学環日本海域 環境研究センター研究	オンラ イン	



	学研究所)	ルドに供給する陸起源物質	集会 「陸起源物質が沿岸海洋に及ぼす影響評価 (その3)」		
2021.9.26	井上敏昭	グイッチン文化・社会の変化と現状	2021年度国立民族学博物館共同研究会「環北太平洋地域の先住民社会の変化、現状、未来に関する学際的比較研究 人類史的視点から」第2回研究会	大阪 (ウェブ開催)	
2021.5.30	野口泰弥	サケを巡るアイヌ施策推進法の課題	日本文化人類学会第55回研究大会	オンライン	
2022.1.20	Hiroya Noguchi	<i>The Ainu Policy Promotion Act and its Impact on the Salmon Culture of the Ainu People</i>	1st Japan-Finland Seminar on the Arctic and East Asia (JAFSAS)	オンライン	
2021.6.11	Naotaka Hayashi	The comparison between Greenlandic ethnic movements and Ainu cultural revitalization: post colonial vs. government-led indigenization	Greenland - Denmark 1721-2021	オンライン (コペンハーゲン、デンマーク)	
2021.6.11	Minori Takahashi	Shedding new light on Okinawa from Greenland: A Comparative Study of US Military Bases	Greenland - Denmark 1721-2021	オンライン (コペンハーゲン、デンマーク)	

⑥国際シンポジウム等(資料添付も可)

参加をした主な国際シンポジウム等		
開催時期(年月)	国際シンポジウム等名称	招待講演/議長の有無

--	--	--

⑦本共同研究に関し実施(主催、共催、後援等)したシンポジウム・集会(注6)等(資料添付も可)

(注6) 研究代表者、共同研究分担者、研究協力者、招へい者以外を含む参加募集によるもの

開催日	実施地 (国、県、市など)	形態 (注7)	シンポジウム・集会等名称	目的及び概要	対象者 (注7)	参加人数 (海外(注8))

(注7)

形態:シンポジウム、セミナー、公開講座、ワークショップ、その他

対象:一般、地域、学生、研究者

(注8) 海外機関に所属するもの

⑧本拠点共同研究に係る成果が科学研究費などの外部資金の応募(予定を含む)やプロジェクトに発展した例があればご記入ください。

・プロジェクト名 ・代表者・関係者(所属) ・関係研究者 ・予定の場合は、(予定)と記載してください	・プロジェクトの主な財源 ・金額	プロジェクト期間	・プロジェクト概要 (目的・期待効果、規模、参加国等) ・これまでの本共同研究との関連性 (300字程度)

⑨研究成果が一般社会産業界などに還元(応用)された事例や新しい研究分野の開拓や教育活動に反映された事例(資料添付も可)

展示会の開催 2021/6/22～7/4「アイヌ民族の現在 1 ラポロアイヌネイション」主催:北海道立北方民族博物館、会場:北海道立北方民族博物館
展示会の開催 2021/10/30～12/12「写真で振り返る日本のアラスカ調査」主催:北海道立北方民族博物館、共催:北極域研究加速プロジェクト(Arcs2) 会場:北海道立北方民族博物館
エッセーの執筆 野口泰弥 2021「ラポロアイヌネイションと展示を作る」『アークティック・サークル』(北海道立北方民族博物館の季刊誌) 120:14-17
林直孝 2021「氷の島で人と自然、人と人のつながりの厚さを感じる」『アークティックサークル』118: 20
林直孝 2021「牧羊業に誇りを持つイヌイット系グリーンランド人」『アークティック・サークル』119: 10-11

林直孝 2021「空と山とヘリコプターと私の頭」『アーキティック・サークル』120: 10-11
林直孝 2021「暗い冬の明るい季節」『アーキティック・サークル』121: 10-11
林直孝 2022「くり返す自然、一瞬の私たち、わからない世界」『アーキティック・サークル』122: 10-11
林直孝 2021「変化とともに口きるグリーンランド口:「らしさ」の源」オンライン講演会「暮らしの変化と口化伝承」北極域研究加速プロジェクト(ArCS II)沿岸環境課題と国口アイヌ口族博物館による共催 6月19日

⑩その他国際研究協力活動事例

事業名	概要	受入人数	派遣人数

⑪学会賞等受賞、アウトリーチ、取材、その他

年月日	所在・出典・新聞名等	受賞者・関係者(所属)	研究課題名・賞名・内容等
2021.04.16-	BBC(英国放送協会) /AppleTV	立澤史郎(北大)	『Narrated by David Attenborough - The Year Earth Changed』製作協力
2021.12.25	NHK 総合	立澤史郎(北大)	『なりきり! むーにゃん生きもの学園』監修(「サンタの相棒! 赤鼻のトナカイになりきり!」)
2022.01.13	日本テレビ	立澤史郎(北大)	『THE 突破ファイル』監修(「村に現れたサル・イノシシ・クマをどう撃退する? 公務員が地域と連携して村を救った突破劇」)
2022.03.01	テレビ朝日	立澤史郎(北大)	『羽鳥慎一モーニングショー』解説(「ひたすら黒猫をなめる鹿たち」)

記事コピー等を添付してください。

⑫コロナ禍の影響と対策

本共同研究へのコロナ禍の影響と対策(改善・代替策、計画変更、工夫等)、助成金執行率(%)について記述してください。

影響の事象	対策の有無と内容 (計画変更・中止、改善・代替策、工夫等)
当初は、北海道大学にて研究集会を2回、開く予定であったが、海外渡航、国内旅行が難しくなった。	2ページの表の一番上の欄に示したように、オンライン会議(1回)に変更した。

2カ年事業の成果としてのワークショップ(2月)を行い、成果を一般へ普及出来なかった。

ワークショップは取りやめ。